



内田 吉宣 さん

電機メーカー勤務
 技術経営 (MOT) プログラム (博士前期) 2009年3月修了, 博士後期 2016年9月学位取得。内平研究室 (知識系)。研究テーマ「プロジェクトマネジメントにおける経験知抽出の取り組み」

― 大学院への社会人入学、決意されたのは

内田 吉宣さん (以下、内田) 企業ではナレッジマネジメント関連の研究を続けていて、入社した当初から「いつかは博士号を」と漠然と思っていた。職場で、社員を技術経営 (MOT) プログラムなどで勉強させようという動きがあり、そこに手を挙げたのが発端で、まずは修士課程を志望しました。30歳を少し過ぎた頃です。

― 本学を選ばれたきっかけは?

内田 上司や先輩が卒業していたり後に教官に就かれたりで、JAISTについては多少の接点があり興味を持ちました。知識経営の生みの親である野中郁次郎先生が創設されたコースである、ということも魅力でした。とはいえ、入学前の説明会と資料だけでは、実際の授業がそれほど面白いとまでは想像していませんでした。

― 仕事と研究の両立、どのように対処されていましたか? 家族のご理解は?

内田 会社は応援してくれていましたし、妻にも結婚当初から博士号については納得してもらっていたので周囲の理解については問題ありませんでした。入学直後に長女が生まれたのですが、何とか修了することもできました。時間の制約については、やりくりしていたというより、楽しくて充実していた。記憶が残っています。大変、という感じはなかったですね。

― 何か秘訣などあったのでしょうか?

内田 JAISTの場合、働きながら学びやすいように授業が組まれていることがありがたかったです。月々金の夜3時間と土曜日の半日で1ユニット、という集中形式なのです。

からも非常に刺激を受けます。新たな価値観を得られたという気がします。

― 忌憚なく意見を交えることができる、貴重な場だったそうですね。

内田 学生たちはバックボーンが異なるし、年齢もまちまち。この会社だとかいう風に対処しているとか、こういう業種でこんなスキルがあるなど活発な議論の中でさまざまな考え方や実情を知ることができました。ディスカッションが盛り上がり上がりました。…という懸念は不要。いつも盛り上がりすぎて、なかなか終われないくらいでした。

― 研究を進める中で得たものは?

内田 企業研究をする中で、大学院で学ぶことによってアカデミックな視点でも捉えられるようになったのは収穫です。

JAISTでは「問題の本質をまず明確にしない」と常に指導され、鍛えられました。社会科学系の研究の場合、「何のために?」ということから考えなければならず。理系出身の私には当初慣れないものでした。理系脳から文系脳へのシフトチェンジと言いますか……。仕事で取り組んできた理系的な視点で捉えていた問題解決のアプローチを、社会科学のアプローチに置き換えて考えることは苦勞もありましたが、教官指導による思考のトレーニングで鍛えられ、実になった気がします。プロジェクトマネジメントをテーマにした修士論文は、賞をいただくことができました。

― その論理的思考を会社でも活かすわけですね。

内田 会社でもこうした考え方を必要とする部署にいたので役立つと思います。「JAISTに通ってから変わったね」みたいなことは社内でも言われ

― 「平日夜間、土曜・日曜集中開講」で1単位を取ることができる、という独自のシステムですね。

内田 週1回の授業を長期間受けて1単位、という通常のスタイルでは頭の切り替えも意外と大変なんです。「この週は忙しい」と腹を括って臨めば、毎日連続の講義は集中もしやすく何とか乗り切れる。もちろん、最優先は仕事ですから、どうしても時間がやりくりできず週後半は受講できずに落としてしまった、という単位も無かったわけではあります。それでも、興味深い授業はとにかく履修しておくよう心がけたこともあり、最終的に単位は間に合いました。

― 社会人が研究しやすい環境が整っているわけですね。

内田 そうです。仕事の都合でどうしても2年で修了できそうにないと判明した場合は、「長期履修制度」を活用したりもできます。追加の授業料を払わずに期間を伸ばすことができる、ありがたい制度だと思っています。

― 授業内容についていけるだろうか、という不安は?

内田 社会人コースの場合、1日フルで仕事をした後ですからね。アカデミックな話ばかりの講義主体な授業であれば睡魔に襲われたかもしれません (笑)。

しかし、JAISTでは少人数でディスカッションする授業が本当に多いです。教授の講義をただ聞くだけではなく、こちらからも発言して……というインタラクティブな授業はエキサイティングでした。理解できないことが出てきても、その場で質問してしまえばいい。と。学生たちも社会人として何かしらの問題意識があるので、そこをベースに議論をすることで教授のみならず同級生

開されるので、希望者は事前登録して相談事項などを持ち込むのです。いろいろな視点からの見解を聞けるというのは、とても意味がある気がします。

― 博士課程もJAISTを選ばれたそうですね。

内田 修士課程を終えて2〜3年後に博士課程へ。実際、他校もいくつか調べましたが、結局JAISTを志望しました。研究テーマに合っていたこと、修士課程で内容に納得していたことなどが理由です。

実は、JAISTの前に別の大学院で修士号を取っていたこともあり、いきなり博士課程への進学も考えたのですが、まずは修士課程へ進みました。振り返ると、まずは修士課程で論理的思考のトレーニングをみっちり積んだことが博士課程で活きたと実感しています。

― 最後に、入学を検討している方へのメッセージを。

内田 JAISTは学位を取るという他に、自分のペースとなる素養みたいなものを高めることができた場だと実感しています。先生の講義や指導はもちろんです。学生たちのディスカッションから得られた情報や考え方に刺激を受けたことも大きな糧となっています。こうした議論ができる環境は、なかなか得られるものではありません。

……と言いながら、私自身もJAISTの魅力は入学してから気づいたことがほとんどです。皆さんも説明会などに参加してみると、イメージがもう少し湧くかもしれませんね。「こういう研究をしたいのですが」と、先生がたに熱く問いかけていた (後の同級生の) 姿なども記憶に残っています。こういう思いで来る人がいるのは楽しいな、などと思いがながら。

ディスカッション中心の1週間集中講義形式など、社会人が学びやすい環境が整っていました



関 信彦 さん

医療サービス企業勤務

サービス経営 (MOS) プログラム (博士前期課程) 2018年3月修了予定,
博士後期進学予定, 神田研究室 (知識系)。研究テーマ「知識集約型サービス組織における個の知の創造モデル」

— 大学院への社会人入学、決意されたのは？

関 信彦さん (以下、関) サービスマネジメント、サービスマーケティングを今一度、きちんと学びたいと考えたからです。サービスとは何だろう？と。実は30代後半、2001年から別の大学院でマーケティングを勉強した経験があります。その当時も学んだサービスマーケティングなのですが、十数年を経る中でかなり進化を遂げているんですよ。新しい概念が出てきている、とすごく新鮮に感じて改めて学びたくまりました。勤務先では現在、社内情報システム部門の責任者を務めています。ITベンダーから見るとサービスをj提供する側について、社内に対してはサービスを提供する側にもいる。サービスにまつわるこの関係性を改めて勉強できたら面白いかな、と。

— 本学を選ばれたきっかけは？

関 「サービス経営」をキーワードに、インターネットも活用しながら学校を探しました。比較的新しい概念であるサービス・ドミナント・ロジックなどもJAISTで学ぶことができると知り、こうしたスピード感に触れられることもあって興味を持ちました。勤務先からも自宅からもアクセスがよい、駅近という地理的条件も整っていました。ここ社会人コースは本校ではなくサテライト校であるという点で、先生や授業は充実しているのか、図書館利用はどうなのか……など多少の不安が無かったわけではないですが、入学して実際に良かったと今は考えています。

— 入学後に実感された、そのJAISTの良さは？

関 「平日夜間、土曜・日曜集中開講」で単位を取れる形式も、私には学びやすかったです。学期のはじめにスケジュールが決まるので、この単位を取るためにこの週は残業しなくていいように調整しよう、などコントロールしやすかったです。毎日連続の講義で集中力が途切れないことにより、その授業の狙いをしっかりと意識して終えることができます。

— JAISTで得たものは、仕事の現場やご自身の中で活かされていますか？

関 たくさんインプットされるのがあって、ひとつの事象をいろいろな見方で捉えられるようになった気がします。カメラで言えば、レンズをたくさん手に入れたような。レンズを変えれば、当然見え方も違う。見え方が変われば考え方も変わると認識できて、そうした視点は活かされているのではないのでしょうか。また、理論ではこう考えられるけれど実社会では違う、ということがちろんいろいろとあって、そのあたりを踏まえるというのは私にとって知的な刺激になっているな、と。これは面白い、社会に役立つかもしれないということも自分でイメージできるようになりました。時間は掛かりましたが鍛えられました。

— 入学前は想定していなかったことなどありますか？

関 修士論文のテーマは、まさにそんな感じですが。入学試験では「こういう研究をしたい」という計画を提示するのですが、そこに書いた通りの研究をして修了している人はほほいと思います。

関 例えば、「個別ゼミ」という特別なプログラムですね。学生1人に対して専門分野もさまざまな教員3〜4人が同席し、修士論文の研究について助言してくださるというプログラムで、通常の授業とはまた違うインプットがあります。任意で申請するゼミで、活用頻度は学生それぞれです。私としては、先生方とインタラクティブに話せる機会を提供してもらえるのは魅力的で、貴重な体験のひとつです。

— 「個別ゼミ」をどのように活用されていたか、教えてください。

関 修士論文のテーマを揉むにあたり、自分が考えていることが学問として成立するのか？その検証を「個別ゼミ」でおこないます。1回に与えられる30分のうち、前半15分で自らの考えを述べて、残りの15分で先生方からの見解をシャワーのように浴びるのですが、最初のうちは自分の考えを15分でまとめるなど到底難しくして。今から思えば、どんな研究をしたいのか考えをきちんとかためることもできていませんでした。鋭い指摘も相当受けました(苦笑)。先生方に相談に乗っていただくことで、自分が気づかなかった方向性や研究の面白みがどんどんと見えてきました。考えを広げては収斂させるという作業を何度も繰り返すことで、ようやく納得のいく研究方針をかためることができました。

— 能動的に学ぼうとすればするほど面白くなる、と。

関 そうですね。思考を広げて、それを収斂させるという作業を繰り返したとお話ししましたが、そ

最初は「サービスを提供する側と受ける側の関係を見つめたい」と大きく考えていたわけですが、長い検討の末に決めた修士論文のテーマは「個人がどうやってサービスのための知識を獲得するか」。サービスの領域に捉われない「知の創造」にフォーカスして深掘りすることになったのです。

— 続いてJAISTの博士課程に進まれるご予定とか。

関 修士課程で学ぶにつれて、研究を継続したい、ものごとの本質をもっと理解したい気持ちが強くなりました。

このテーマを外の博士課程に持つていって研究を継続できるのかは未知数ですし、一方でここにはすでに理解してくださっている先生がたが大勢いらっしゃるのです。また、単位もある程度持つて行ける、入学金不要という学内進学のメリットも無視できません。

— 大学院進学を検討している社会人に向けて、メッセージを。

関 社会人が大学院で勉強するとき、会社での課題を持つて臨んでいるところが多かれ少なかれありますよね。大学院でも仕事のことを引き続き考えているようなところがあるわけですが、環境が変わって周りの人も変わると、同じ事象も見え方が違ってくるのがいいた。大学院で学ぶようになって、そう思ったんです。

そして、進学を迷っているなら、とにかく思い切って飛び込んでみることをお勧めします。入学前に気になる点があれば、JAISTでも相談室を設けていて対応してくれますよ。

複数の教官による面談「個別ゼミ」が特徴的、論文テーマを練り上げることができました

それを独力で続けるのはやっぱり難しい。先生に相談したり、学生同士でディスカッションしたりで少しずつ前進する……やはり先生との対話の中でいただくサジェスチョンがいちばん大きかったです。

— JAISTならではの特徴は、他にもありますか？

関 はい、「長期履修制度」というのがあります。2年での修了が困難な場合は、申請すれば授業料を追加することなく2年まで延長できるといいうのです。

入学当初、大学院は2年で出るものだろうと当然のように考えていたのですが、研究の進捗や仕事の忙しさを考えて保険のつもりで、私も1年目の終わりに1年延長を申請しました。結果的に半年の延長で修了することになりました。仕事が優先となる社会人にとって非常に役立つ制度だと思えます。

— 仕事との両立は、社会人学生ならではの悩みです。ね。

関 タイムマネジメントとしては必須です。今も続けていますが、朝5時には起きて頭がクリアな状態で勉強しています。とにかく効率がいいので、JAIST関連の勉強は毎朝の2時間をメインに続けています。また、仕事の予定の合間に勉強時間を組み込んだタイムテーブルを1週間単位で作っています。土日も授業以外の時間は家族サービスをしたいです。

— 通常の授業についてはどうでしたか？



紺野 稔浩（としひろ）さん

自動車関係企業勤務
 技術・サービス経営（iMOST）コース（博士前期）2017年3月修了、
 内平研究室（知識系）。研究テーマは、「製造業の子会社における組織
 変革の研究 - 自動車メーカー用品子会社A社におけるアクションリ
 サーチ -」。

「自動車メーカーを定年退職後、子会社に移られてからの大学院進学と伺いました。50代からの挑戦とは？」

紺野 稔浩さん（以下、紺野） ずっと技術者として開発や設計に携わって来た会社員人生もそろそろゴールが見えてきて、自分がやってきたことを一度きちんと振り返ってみたいとは考えていたのです。MOTや大学院の社会人コースという言葉も雑誌や新聞で目にするようになって。一方で2011年には東日本大震災がありました。原子力や復興の問題など、人間の力では如何ともしがたい出来事が起きてしまった。そんな中で、技術者として自分がやってきたことにどんな意味があるんだらうかと考えるようになり、これを機会に大学院で勉強してみようかと決心したのです。技術で何でもできる、くらいに考えていたのが、震災を経て、その幻想がもろくも崩れました。技術者はどういふことをしなきゃならないか？を大学院で考えてみたい、と。技術者倫理について、ですね。それと、今こそ理系では大学院進学が一般的になりましたが私が大学を卒業した頃はごく稀で、憧れもありました。

「テーマを携えて入学されたわけですね。」

紺野 最初は、この技術者倫理を修士論文のテーマにしたのですが、先生方に相談したりする中で、どうやらこれは客観的データを取りにくいテーマであると気づかれました。客観的データによる裏付けは論文には必須の要素ですから、さてどうしようかと。一方で、会社の中でも、組織を活性化するなど経営側としての課題がどんどん出てきていて、それならばアンケートやインタビューな

どさまざまなデータが取りやすいこともあり、私が務める企業内の課題をどう解決するかのプロセスを研究したほうがよいかもしれないと軌道修正しました。アクション・リサーチ、会社で活動しながらその成果をまとめていくという方法論です。一方、大学院入学の動機のひとつとなった技術者倫理についても「副テーマ研究」の課題として扱うことができました。

「専攻分野に隣接あるいは関連するようなもうひとつのテーマを選んで、副テーマとして研究できるのがJAISTの特長のひとつでもありますね。」

紺野 JAISTでは、学生1人に対して担当教官と副担当がつき、さらに副テーマにも担当教官がついてくださるので手厚かったです。学術的なレポートを仕上げる作業は、私にとって初めての経験でした。主たる研究課題を扱う修士論文に先立って、副テーマのレポートからまず手がけることができたのは、その後に論文をまとめていく上でいいトレーニングになりました。

「その後の修士論文では、企業活動と研究の方向性をうまく融合させることができたわけですね。」

紺野 そこに辿り着くまで、結構大変でしたけれどね。担当教官、授業に関わる先生方に随分と相談しました。「個別ゼミ」でも多くの先生方の指導を受けながら詰めて行きました。JAISTの特長でもある「個別ゼミ」は、修士論文をまとめるにあたってさまざまな意見が聞ける非常にいいシステムだと感じました。とはいえ、専門性に基づいて述べられる見解は美にさまざま、受け手が自分の軸をしっかり持っていいとせつかつくの助言で

根拠が揺らいでしまう危険性もあります。社会である程度の経験を積み自立した考えを持つ社会人大学院生にこそ有益なのだと思います。

「社会人コースとはいえ、50代の学生は少数派だったのでは？」

紺野 講義の中でも議論の中でも、年齢についてはほとんど意識しませんでしたね。もちろん私より年下の先生もたくさんいらっしゃったし、会社での部下たちよりさらに若い同級生も。向こうは感じていたかもしれませんが（笑）。若い同級生たちとも対等の立場で議論できるというのは、会社ではまず味わえないものであり、自分の知識をどんどん増やせる、いい刺激を受けました。

「体力的にきつかった、などありますか？」

紺野 講義が多い1年目はさすがに少しくつかったですね。自宅がやや遠方なので、夜9時半過ぎに授業が終わってすぐ帰宅しても12時過ぎなんです。集中講義の週は割り切って、通学時間を節約するために毎日ではないですがビジネスホテルも利用しました。体力的にはラクをしよう、と。2年目は講義がそれほど無いので、移動の大変さは減りました。体力的というよりは、集中力の持続時間は多少短くなっていったかもしれませんが、知的好奇心がそれにまさっていたと思います。

「理系の技術畑で長きに渡り活躍された後、社会科学系の研究をするのはいかがでしたか？」

紺野 論文作成にあたって、単純に「私はこう考える」だけではダメで、それを支える客観的データ、

根拠をきちんと提示しなければならない。アンケートやアクション・リサーチなどからデータを得なければならぬ。そのところが、実験結果が割と単純にデータとなる理系とは少し勝手が違いましたね。理系のフィールドで仕事をしてきた人も一度は社会科学のものの見方を勉強すると仕事が目白くなるし、成果も上がるだろうと思います。少し幅を持たせて考えながら、専門を極めていくことができるようになるんじゃないか、とも。自分の仕事が社会的にどんな意味があつて、それが最終的に人間のためになるかどうか。そういうところまで考える幅の広さは、プロジェクトや組織を引っ張るときに必要なはずだと思うようになりました。

「論文は、どんなスケジュールで？」

紺野 本格的に準備を始めたのは2年目の6月くらいでしょうか。会社の夏休み、と言っても1週間か10日間はほとんど費やして、昼間はデータを整理してエクセルにまとめ、夜は文献を読む、という毎日。そうして煮詰めたものに対して先生方から意見をいただくわけです。そしてまた繰り返し、というのを続けていたわけです。その途中で、このペースだと2年間で修了は難しいと判断して「長期履修制度」を活用することにしました。案の定、2年目の後半には仕事も忙しくなり、3年目に持ち越すことに。収集したデータをまとめたリ文献調査をしたりでほぼ毎週土日潰れましたが、それでもなかなかまとまらず……。論文をまとめるには一定のフォーマットに合わせつつ、その中でエビデンスで裏付けられた自分の見解を出さなければならぬ。そのロジックを整理するのに相当悩みましたが、最終的には3月に修了す

ることができました。一応、最長の4年で修了するように申請していて、結果的に3年で。いずれにせよ、この歳になってあれだけ必死に文献資料を読み込んで、リサーチをして、論文にまとめるという一連のプロセスを遂行できたことがある種の自信がつかえました。

「真正面から論文に取り組まれたことで、得られたものは大きかったようですね。」

紺野 これまで何をやってきたんだらうという漠然とした思いを、修士論文という形で昇華させることができました。また、私も企業においてはそれなりの達成感も持ち定年も近づいてきた身ですが、もっと広い領域がまだまだ世の中にはある、まだまだ解らないことだらけであることを実感できたのもJAISTで勉強に取り組んだからこそ。大学院は敷居が高いように見えますが、少し頑張っただけで、また違う世界が必ず広がります。



出産による働き方変化もあって“強み”の必要性を痛感、 社会人学生が指導を受けやすいとの評判から JAIST へ



池田 理恵 さん

総合オフィスメーカー勤務

サービス経営 (MOS) プログラム (博士前期) 2018年9月修了予定
白肌研究室 (知識系)。研究テーマ「小さな行動から大きなうねり (変化) をつくりだすアプローチの研究 郊外住宅地における市民活動を事例として (仮)」

「仕事と育児を両立させる日々、さらに大学院での研究を決意されたその動機は？」

池田理恵さん(以下、池田) 私はオフィス家具メーカーで、オフィスの空間設計に携わっています。今まさに働き方改革が注目されていて、「働きやすさ」の追求も重要視されるようになりました。さらなる知識の必要性を感じる一方で、出産を機に自身の働き方がガラリと変化して出産前のように我武者羅に働くことはできない。ならば、空間設計のデザイン以外にも自分の強みを持った方がいいのではないかと。知識を少しでも広げたいと思うようになりました。クライアントを説得するために、もっと理論や知識が必要なのではないかと考えたのです。息子が保育園に通っていた2年半前のことです。

「時間を確保できなくなった代わりに、仕事の質を高めていこうという考え方でしようか。そんな新たなチャレンジには躊躇するワーキングマザーも少なくないと思うのですが、不安は無かったですか？」

池田 私にはできないとあきらめるのではなく、まずやってみよう。やってみてできないかどうかを考えてみようじゃないか。やりたいと思ったらできるんだということを周りにも認めてもらいたい……そんな気持ちで進学を決めました。

先ほどもお話したように、ここ数年で日本の企業での働き方もかなり変わって効率化が進んでいると思います。遅れている方だと思える私の勤務先もノー残業を推奨しています。出産後は17時20分で仕事を終える短時間勤務を選んでいただくことも

あり、社会人コースの受講には差し障りがないという判断もしていました。家族の協力と理解もありました。ちなみに学内でまだ女性の学生は少ないのですが、昨年から同じ研究室にはもうひとりワーキングマザーが増えています。

「家事はご夫婦でシェアしながら、ですね。」

池田 夫もひとり暮らしの経験がありますし、分担しています。結婚前は家事をシェアできることが大切だと時には思っていたのですが、後になって、これはとても重要なことだと気づきました(笑)。勉強は夜中と、通勤時間で文献を読むなどして時間をやりくりしています。JAISTの2年目は修士論文に集中するため、必要な単位は1年目で取ってしまおうと考えたのですが、さすがに疲れが出たときもありました。夫から「講義を取りすぎて疲れている」という苦言はありましたが、「あなたがしなければならぬことはたくさんある」という満足を満たすことではなく、研究でしよ」といった内容でした。

「進学先をJAISTに決めた理由は？」

紺野 先生と学生との距離がとて近く、指導を受けやすい環境が整っているという話を知人から聞いていたことが決め手のひとつとなりました。国立なので授業料が安いという点、勤務先からの遠くないという点もありました。それならできるかもしれない、と。決断したら、あとは速かったです。

「研究のテーマは、どのように決められましたか？」

「JAISTの講義で、どんな収穫がありましたか？」

池田 理論に基づく説明によってクライアントは納得してくれる、というのはJAISTで学ぶようになってわかったことです。どのような根拠を示せば自分のアイデアを人に理解してもらえるか、少しずつですが勉強してきたなと思います。

また、仕事と密接している講義内容で、職場での実践レベルに置き換えるかどうかという点のかを具体的に考えると、大学とは大きく違う点だと感じました。組織のマネジメントにも興味が出てきました。現状では、会社での私のポジションでは経営に関わることになかなか介入できませんが、いつかはそこに携われたいなと思います。

「JAISTへの進学を検討する人たちに伝えたいことがあればお願いします。」

池田 迷っているのであれば、興味のある講義を「科目等履修生」として受講してみれば良いと思います。その後、入学する場合には単位もそのまま加算されます。

個人的には、吉田夏彦先生の「科学哲学・科学史」の講義に感動しました。数学とも科学とも哲学とも言わない領域を扱った内容で、実にエネルギーが豊富な1週間の講義でした。その素晴らしさが伝わりそうな知り合いの何人かには、すでに熱くすすめています。

「小さなアクション」を起こして、自ら研究対象にもなってしまうおう、と。

池田 小さなアクションとして、昨年末に私が住む地域での多世代交流を仕掛けてみました。どういう人に来てもらいたくて、そのためにはどのようなサービスを提供したらよいかなどアプローチの方法を、自分自身が理論と実践を行ったり来たりしながら、点を繋いで線、そして面に繋げていくことが必要だと今、実感しているところです。JAISTで先生方の指導を受けながら、ブレイクスルーできたと思います。学校の講義以外でも、研究に関わる内容のフォーラムやセミナーに足を運んでいるのですが、どなたも実際に行動

池田 オフィス空間の設計では、完成した空間がその後、どのようにマネジメントされているか我々にはわかりません。そこに興味があったので、フューチャーセンターなどのマネジメントがどうなされているかを研究したいと考えました。

しかし、企業内の調査は想像以上に難しいという事実を直面して。調査の対象がパブリックなものである方がデータを得やすいということも考え出しました。やがて私が興味を持ったのは、市民が行政からの働きかけではなくボトムアップとして何かアクションを起こすことがコミュニティの強さに繋がっていく、ということ。小さいアクションから変革へと繋げるにはどうすればよいか、ということでした。といいながら、なかなか研究のフィールドに入り込めない状態が続いたのです。どう調査すればよいかもわからずにいたのですが、自分でやってみればよいのだと気づいて、そこから研究は動き始めました。